

令和3(2021)年度

姫路市 大学発まちづくり研究助成プロジェクト成果報告書



令和4年3月

兵庫県立大学 環境人間学部 歴史ストーリー研究グループ
石倉和佳 (代表)

目次

はじめに 研究の目的と研究概要

第一章 姫路の観光の歴史と史料（明治・大正期）

第二章 姫路市内調査報告

2-1 姫路城近隣

2-2 白国地域

2-3 野里地区

2-4 魚町・二階町

第三章 和歌山県 わかやま歴史物語 100 ルート調査報告

第四章 観光ルート提案

おわりに

主な参考文献

はじめに 研究の目的と研究概要

本研究は、姫路城とその周辺に残る歴史的史跡、名所、街路、景観などを結ぶ「歴史ストーリー」を構築し、徒歩による散策ルートで結ぶことで、新しい観光の在り方を提案することである。姫路城を擁する姫路市の観光は、城とその関連施設、および書写山などの神社仏閣に集約される傾向があり、姫路に残る近代の歴史的なストーリーとともに探訪する観光上の仕掛けに乏しい。姫路市に加えて、市内各地域の自治会、商店街、小学校区などが戦後から現在まで様々に行った地誌記録、観光案内、街路の標識等は存在するが、街歩きとともに観光を楽しむ仕掛けとしての包括的な政策はそこに働いていない。姫路を訪問した観光客が、自分なりの旅を見つけるための「歴史ストーリー」とそれに沿った街歩きの案内があれば、市内滞留時間が増大し、姫路の町のイメージ向上にも結び付くと考えられる。しかし姫路地域の観光に利用できる歴史的スポットの多くは、姫路城を求心力とした観光客の流れの中に見えなくなっているのが現状である。

こういった状況を受けて、姫路市に残る様々な歴史的な名所や事跡、遺構の文化財的価値の再発掘と、それらに関連する人々の物語を調査することで、姫路を中心とした地域の埋もれた観光資源の活用之道を検討することは重要である。本研究では主に次の4つの点から調査、研究を行った。

① 姫路の観光の歴史と史料（明治・大正期）（第一章）

あまり利用されることのない明治以降の出版物で姫路観光案内と考えることができる記述を検討し、姫路市内の名所、旧跡の説明を整理し、その中から現代に生かすことのできる観光資源を考察した。姫路市に残る江戸から明治期にかけての歴史、文化資源の多くは、空襲で破壊され、戦後の市街開発で形を失ってしまっているものもある。しかし姫路城下の江戸期の暮らしや趣味に結びつく歴史的事項を、歴史的ストーリーとして実際の街歩きと結び付けることは可能である。ここでは、明治・大正期の姫路の観光案内を、現代的な観光の文脈で読み直す試みを行った。国立国会図書館デジタルコレクションなどで収集した明治から大正期にかけての姫路の旅行、観光案内の記事の概略をとりまとめ、各資料についてのコメントおよび評価を付した。

② 観光ルート制作のための姫路市内調査（第二章 姫路市内調査報告）

姫路城観光と併せて姫路城近隣地域を徒歩で散策するコースを検討するために、姫路城中濠界限、野里地区、魚町・二階町地区、白国神社とその周辺の地域を調査した。調査には学生も同行する計画であったが、新型コロナのまん延による行動規制により、フィールドワークを十分行うことができず、予定したものの半分ほどしか実施できなかった。白国地域および野里地域は主に代表者が調査した。第二章には、姫路市内調査報告として、それぞれの調査地域のルートおよび情報、観光ルートとしての評価を記載している。

ルートの調査の際に重視した点として、観光行動を単に目で見えて楽しいと思えるものだけを追い求めるのではなく、その土地の歴史を感じ学習する機会を提供できるか、と

いう点に注目した。これは観光行動が持ちうる教育的側面を再評価することにもつながると考えられる。また今回のルート調査においては、徒歩による散策に快適であるか、安全であるか、道は分かりやすいかなどの視点からの評価も加えており、今後のまちづくりにおける観光資源（特に江戸から明治期）の保存や整備に関する提言を、巻末の「おわりに」の中にまとめた。

③ 他府県の事例調査(第三章 和歌山県 わかやま歴史物語 100 ルート調査報告)
姫路の観光ルートの参考になるものとして、同じく城を起点とした周遊ルートを含む「歴史物語」を観光政策として打ち出している、「わかやま歴史物語 100」をとりあげ、2つのルートを調査した。姫路城を起点とするルートを考える本研究には、非常に参考になる事例であり、歴史ストーリーの構築について、姫路藩および姫路市の歴史の特殊性を考察する必要があることが分かった。具体的な調査結果および参考になる点は、第三章、および「おわりに」にまとめている。

④ ルートの提案 (第四章 観光ルート提案)

ここでは、第一章から第三章までの内容を踏まえて、観光のための散策ルートの提案を行った。3つのルートを提案したが、それぞれのルートの特性により、「姫路城観光のオプション・ウォーク」、「歴史探訪」、「地域の営みと歴史が交錯した景観学習」という特徴づけを行っている。実際のルート制作にあたっては、信頼できる歴史史料があること、文化的価値を認め得るものであること、姫路のイメージアップにつながるものであること、今後観光開発に利用できる可能性が見込めること、などを考慮した。

研究グループ役割分担

- 1) 報告書執筆および編集 石倉和佳
- 2) 姫路城からのまちあるきルート調査 石倉和佳、石倉ゼミ 3 回生 (池奥桃花、大橋昂生、小林みゆ、春本ひかり)
- 3) 県外事例調査 石倉和佳

その他

令和3年度は新型コロナのために夏休みが過ぎるまで出張が規制されたこともあり、外部の専門家等との交流はできないままに終わったことが残念である。本報告書を執筆するに際して参考にした主な文献は文末にまとめて記載している。本文中に書誌情報の明記が必要な場合は、作者および書名等を明記した。

地図情報 Google map、わかやま歴史物語 (和歌山県観光協会) の著作権 (者) は必要ところに明記している。その他、特に断りのない限り、写真はすべて代表者の石倉和佳が撮影したものである。撮影日は個別に明記していないが、令和3年11月から令和4年1月の間である。

(表紙：橋本政次編『姫路名所案内』(1913) 姫路市地図より)

第一章 姫路の観光の歴史と史料(明治・大正期)

資料調査としては、まず姫路および近隣地域の江戸後期、明治期、大正期の地誌、案内、名所案内、鉄道案内などの資料を国立国会図書館デジタルコレクションなどで収集した。それらの書籍、史料を整理し、重要なものを抽出したのち、姫路各地の名所や重要なスポットとされた場所、建物、事物などの記述をとりまとめた。また、姫路市教育委員会が製作した「文化財見学シリーズ」、各自治体が編纂した『ふるさと八代』『ふるさと白国』なども参考にした。

以下、1-1には、主な明治・大正期の観光案内、名所案内として特に重要と考えられる『山陽鉄道旅客案内』(1891)、『沿革考証 姫路名勝誌』(1899)、『姫路名所案内』(1913)について、取り上げられている名所、旧跡等を紹介し、注釈と評価を掲載している。次に1-2には、その他の収集資料として、姫路についての記事がある書籍、観光案内について、どのような記載があるかについての紹介を記した。

1-1 主な明治・大正期の観光案内、名所案内

【1】『山陽鉄道旅客案内 一名山陽道名所図会』山陽鉄道会社運輸課編纂 1891年

1888(M21)に設立された山陽鉄道会社の路線案内である。初代社長は後に三井に入り、銀行を立て直すなど辣腕をふるった中上川彦次郎(1854-1901、山陽鉄道社長 1888-1891)である。国鉄時代に先駆けて、電鉄会社が観光案内を発行するのは先駆的であるが、中上川はイギリスに留学した経験を持ち、鉄道会社にあってもロンドンから新知識を吸収していたということであり、イギリスのマレー社の旅行案内なども知っていた可能性もある。マレーの『日本の旅行者のためのハンドブック』(*A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan*)は既に発行されており、『山陽鉄道旅客案内』の発行年には、西日本も網羅した第三版(*A Handbook for Travellers in Japan*, ed. B. H. Chamberlain)が発行された。この時代汽車での遊覧旅行をできる日本人が数多くいたとも思えないが、当時開通していた神戸から尾道、三原までの各駅の近隣地域の名所、旧跡などを案内し、コンパクトにまとめた体裁となっている。明治20年ごろの兵庫県から岡山にかけての山陽道の地域の状況を伝える地域誌であり、貴重な記録である。なお、『山陽鉄道名所案内』(辻岩雄編)という案内が1894年に発行されているが、個人出版でありページ数を半分以下にした簡便な体裁のものである。

<姫路市の名所、旧跡 76頁から92頁>

姫路市は「酒井氏十五万石の城下」と紹介され、姫路市街に七千戸、士族は三千戸ほどあったが今は一千戸ほどに減少した旨が書かれている。当時の姫路市街は旧城下の町とほぼ変わらず人口も二万七千人程度であった。「旅店、料理屋、貸座敷」の紹介があり、壮大な旅店として米瀬、すいたにや、中井屋、料理茶屋の井上楼、丸万楼が挙げられ、西魚町の芸妓や野里梅ヶ坪の遊郭への言及もある。名所として以下のものが挙げら

れている。

姫路城 歴史的由来および軍隊の駐屯地であることが紹介されている。歴史的由来は赤松則村から秀吉、池田輝政と説明が続き、徳川時代は酒井家のみ言及されている。徳川時代の治世についての詳細はなく、天守閣を戴く江戸期の姫路城下についての情報はまったくない。これは新政府の時代となり、電鉄会社としては遠くの地域から人々が往来するようになるにつけ、徳川の世を語ることに意義を見出しにくかったことが影響しているとも考えられる。

射楯兵主神社 神社の由来と通称惣社と呼ばれることについての説明あり。二十一年ごとの大祭についての記述、および七月に行われる「神踊り」などの紹介があり、社内の「影向松、血池、清水」の名跡についての言及がある。現在これらの名跡は存在していない。元塩町にある刑部神社に言及があり、城内本丸のものを維新の後に移転したと述べられている。祭神は輝政の産土神美濃刑部村大己貴命とある。

船場本徳寺 「統治に有名なる大寺」と紹介。境内に一大松樹。

景福寺 「船場にある一禅寺、旧藩主酒井氏代々の菩提所」と紹介。

円光寺 「五軒邸にあり、寺内に有名なる一大桜樹あり」と紹介されている。開花の時には市民が訪れるという。この桜がいつまで存在したかは不明。境内の木々および本堂等は、姫路大空襲の際消失したと考えられる。

薬師山 「船場本徳寺の西に当たる一つの丘陵にして山上に明治記念碑を設く眺望はなほだ好く市人遊散の場所なり」と紹介されている。現在は琴陵中学校があり、下にはバイパスが通っており、北東には少年刑務所（M31に当地に移転）があり、遊山の場所とはいえない。これらがすべてなかった時代、薬師山は市街を見渡す良い立地であったということである。

雄山 男山の別字。「古名を長彦山といひ姫山の西にある小山」ということで、城との間に流れる川は妹背川と呼んだという。

三左衛門梁 三左衛門堀と呼ばれる、大規模な運河の跡。池田輝政三左衛門が計画してとん挫したもの。姫路城下への水運は、本田忠政によって船場川を利用して実現した。

亀山本徳寺 「西本願寺の別院として最も由緒ある大寺」とある。

飾磨津 漁業の町の紹介と舟遊びなどの案内があり、飾磨を詠んだ和歌が紹介されている。また、海辺の諸名所として、「会松原、恋の浜、八幡宮、木場明神、八家の地藏」が紹介されている。

麻生山 「播磨富士」と称する山として紹介されている。仁寿山の東にある小富士山である。

白国村梅林 「春初の候姫路に遊ぶものは必ず白国村の梅林に杖を曳かざるべからず」と紹介されており、大正期ごろまで梅の名所として遠くに聞こえた。幾千株の梅の花が開花期には香り立つ様子が描かれている。現在この梅林は存在しない。

石室 「白国村に一個の石室あり」と紹介されている。北平野の北部地域では御輿塚古

墳が知られているが、白国村とあるので、『ふるさと白国』(9-10)に記載されている白国古墳群のどれかかもしれない。

廣峯山 白国梅林に来るのであれば必ず傍らの登山道から廣峯に登るようにと推奨している。参道を登りきると、「景色亦一変し遠近河海の眺望実に奇絶妙絶」ということである。お伊勢参りから帰ったときには廣峯に参るという昔の風習についても書かれている。

増位山隋願寺 聖徳太子の開基として紹介されており、別所長治の焼き討ちにあったのを秀吉が保護したと書かれている。本堂が姫路藩主であった榊原忠次によって再興されたことなどは書かれておらず、江戸期の事績を避ける傾向があるかとも見受けられる。

風羅堂蓑塚 芭蕉蓑塚ともよばれるものである。「(芭蕉)翁の画影及び其旅具、蓑、笠、杖、袈裟、旅硯、旅ざいふ」を収めてあると書かれている。現在芭蕉蓑塚に言及する案内書はほとんどないが、江戸期の姫路の商人達の俳句趣味にはここでも触れられていない。風羅堂は明治七(1874)年に失われたということであるが、芭蕉の像は個人宅に保存されていると昭和の文献にはある(『ふるさと白国』1987年 52頁)。

書写山 「播州の山嶽其の数多しと雖も就中世に聞こえたるは飾西郡の書写山」として紹介されている。西国二十七番札所の圓教寺については、性空上人の開基として、花山法皇、後醍醐天皇の巡礼に言及している。

塩田温泉 炭酸冷泉を温めたものと紹介。夏は鮎釣りの名所という。

【2】矢内正夫著『姫路名勝誌(沿革考証)』1899(M32)年

本書は明治期の姫路の史跡、名勝を網羅的に紹介したのものとして最も詳細なものの一つである。著者矢内正夫(1862-1943)は姫路で活動した郷土史家で、播磨史談会の会長をつとめ、姫路市議会議員としても活動した。播磨史談会は1907(M40)年に姫路史談会として発足し、地域の歴史の研究に加えて、史跡保存や顕彰活動を活発に行った。矢内は明治30年代後半から始まる河合寸翁顕彰事業を精力的に推進した一人でもある。『姫路名勝誌』はこのような矢内のいわば「勤皇志士中心史観」(前田「旧藩勤皇派中心史観の成立と展開」)が現れており、当然ながら矢内の筆は天皇に所縁のあるものや河合寸翁および河合惣兵衛らの勤王の志士らをしばしば取り上げている。明治24年に出版された『山陽鉄道旅客案内』には、江戸期および幕末期の藩士についての言及は極力少なくなっている印象であるが、『姫路名勝誌』では勤王の志士の再評価と、軍事拠点の一つとして伏見宮を師団長に迎えた姫路を、国史にのっとった歴史のある町として提示しているのである。また、明治時代になって読まれるようになった『播磨国風土記』を地名の解釈に多く利用しているところも特徴である。『姫路名勝誌』の全体を総括すれば、先ず第一に、武士の遺構を数多く持つ町が明治天皇の世にどのように町の歴史を捉えようと考えたか、という枠組みとともに理解すべきかと思われる。

また、この書の語り口は、名所や旧跡、事蹟を提示する際に、物事を時間順序で説明

することに徹しておらず、あたかも様々な逸話や物語を周遊するかのように語っていくのが特徴である。観光案内としてみると、地理的な明示が少ないこと、天皇や武将への言及が多いことなどを考えると、近代的な観光を視野に置いた姫路の紹介書とは言いづらい。

このように、現代の目からみると観光案内として難しいところの多い『姫路名勝誌』であるが、明治時代の姫路を知るには様々な情報が提供されており、現代の観光を考える際にも参考にできるものも含まれている。ここでは、そのいくつかを紹介する。

第一章 総論より

姫路市街の範囲

「市街は東の方、市川の西岸より西の方、薬師山の西に達し、南の方、山陽鉄道姫路駅より北の方、野里梅ヶ坪に至り、東西一里半、南北一里余にして、中央に姫路城あり、その他俗に大別して四区となす、城西を船場とし、城南を内町とし、東辺を神谷とし、北辺を野里とす。」当時の第一等地と考えられたところは内町の西にある福中町であるが、現在は繁華街であり市街の中心という風情はない。同様に総社もかつてより境内の面積を狭めており、松が生い茂っていた当時の面影はない。姫路市街の範囲として城と軍隊および内町の賑わいを中心とした市街は、姫路大空襲によってほとんど消滅してしまった。とはいえ、姫路市街の徒歩による周遊を考えるとすれば、現在でもこの地域が中心となると考えられるため、本研究でもこの地域の周遊ルートを2ルート検討した。

第二章 城郭より

赤松貞範から伏見宮へ

城郭の箇所は、本書で最もまとまりがあり、また物語としてもよく書けている部分である。この物語は、後醍醐天皇を支えた尊王の城、姫路城の由来から始まり、明治になって第十師団に伏見宮を師団長として迎えるという成り行きまで一気に展開する。以下にその主要な部分の引用もしくは概略を示し、考察を加える。

[赤松] 貞範は赤松則村の次男にして村上天皇の皇子具平親王の後胤なり、世に所謂村上源氏なり、後醍醐天皇叛臣北条高時のために隠岐に流され給ふとき、則村は播磨佐用郡赤松庄より皇子護良親王の令旨を奉じて兵を起し、摂津の摩耶山に拠り、貞範をして姫路丘にありし稱名寺といへるを利用して城柵を設け、其族小寺頼秀と共に中国を攪せしむ、是れ姫路城の創始なり (11-12)

この部分が姫路城の由来を語ったところであるが、赤松貞範が姫路城を築いた経緯の中に、赤松氏の系統が村上源氏である、すなわち血統として天皇家につながる由緒のあるものであること、そして後醍醐天皇を助けるために戦ったという点がクローズアップされている。後醍醐天皇を助け足利尊氏の軍と対峙し、湊川の戦いで敗れた楠木正成が果てた地を、湊川神社として、建武中興十五社の一つとして整備したのは1872 (M5) 年である。明治天皇の世となり、天皇を助けて戦うという姿は、王政復古後の日本においてあるべき姿と考えられた。この引用部分に込められた意味は、姫路城が後醍醐天皇を

助け建武の中興に寄与した由来を持つ有り難い城であるということだろう。そうした皇国の意味は現在では失われているとみてよいが、姫路城の由来を赤松氏（円心の時代）から説き起こすことは今でも同じように行われている。

姫路城の由来の後は、小寺氏の姫路城主の時代、嘉吉の乱による赤松氏の衰退および山名氏による姫路支配、赤松正則の赤松氏再興と姫路城への帰還、その後の小寺氏および家臣の黒田氏、黒田官兵衛と秀吉の姫路城支配などが語られる。黒田氏が宇多源氏の系統であるなど、黒田氏の家系が天皇家につながるものであることを示唆する箇所が挿入されている。

秀吉の治世については多くの言及があり、黒田官兵衛に加えて、栗山利安の名も見える。秀吉逝去三百年の催しを 1898 (M31) 年に姫路で盛大に行ったという報告も交っている。次には池田輝政の城下町づくりと門の設置、三左衛門堀の掘削や、跡を継いだ本多氏による船場川つけかえ、などの記述が続く。榊原忠次が入府、養子の政岑の女色についても言及がある。酒井家の当主については、名前を列挙することでほとんどの紹介を終えているが、その中で家老河合定恒には言及し、「彼の有名なる寸翁道臣は定恒の嫡孫なり」と述べたついでに寸翁の財政改革の業績を讃えている。いわゆる甲子の獄といわれる幕末の勤王党の粛清については、「姫路藩の多数は佐幕派なりしかば、勤王党河合宗元（惣兵衛）、其子宗貞、萩原政興などに死を賜ひ」と述べられている。他の案内書でも同様であるが、勤皇派への言及はこの時期以後の明治期の案内にはしばしば言及される傾向がある。

以下は明治になってからの姫路城の説明である。

明治二年六月十七日〔酒井〕忠邦封土を奉還して、旧封実収の十分の一凡そ八千石を賜はしりが、明治四年七月十四日廃藩置県となり、城地は陸軍省の管轄に帰して、大阪鎮台の分营地たり、明治十九年第四師団第十連隊の兵営となり、明治二十七八年日清戦争後第十師団をこの地に置かれてより、兵員は年々増しきたりて、去る明治三十一年十一月にて其設備も完整し、月の十三日に司令部も開かれて、二十四日午後二時陸軍中将伏見宮貞愛親王殿下師団長として御着任あらせられしが、十二月十日全県下の官民一致して殿下を始め、師団の将校二百余名を城内なる将校集会所に招請して、師団設置祝賀会を催しけるに來会せしもの七百名に達し、煙火、狂言などの余興もありて頗る盛会なりき、而して師団の午砲は其月二十八日に創めて発せられき (16-17)

この書が発行された前年には、伏見宮の第十師団長としての赴任があった。ここにある記述は軍都姫路の盛隆を強く印象付けるものとなっている。この文章のロジックは、天皇を中心とした新しい日本国の建設と、伏見宮を師団長とした軍が姫路の中心として存在することが二重写しとして描写されていることであり、その歴史的背景となるのが、建武の中興に一役買った赤松一族ということであろうか。『姫路名勝誌』に描かれた姫路の歴史は、農民の暮らしや町人の生業に目を向けるものではなく、その意味で偏向し

たものであるが、矢内による文章は後世にも影響を与えたと考えられ、姫路の町を歴史とともに考察する際には、距離を置いて読む必要のあるものであろう。

第三章神社より

第三章で取り上げられている神社は多いが、現在その場所や社の様子を確認できないもの、観光地とは全く考えられない場所のものも交っているため、代表的なものを抜き出してどのように紹介されているかの概略を記す。

総社射楯兵主神社 「姫路城旧城内にあり」「社領百五十石あり」と書かれ、神社の由来が説明されている。ここで特筆に値する記述は、赤松政村が始めたという祭りのことである。「大永元年（1521）年七月十三日より三日間置塩城国主赤松政村始めて臨時祭を行ふ、この時は氏子なる宿村、国府寺村、福中村、北条村、南條村、南畝村、山井



総社の祭りの行列を描いた図。なぎなたを手にする武者が多く書き込まれている。三山の出し物も背景に見える。修羅踊りと呼ばれるものが実際にどのようなものであったかは時代によって異なるとも考えられる。

村、八代村、野里村、庄田村、津田村、中村の十二ヶ村より、踊子三百九十七人出て、刀剣鎌槍などの武器を持して殺伐極まれる踊舞をなし死傷多かりしが、其後二十年ごとにこの式ありて維新前まで続けり、是を修羅踊と称す、修羅とは獄鬼の梵称なり、今も社殿の西南隅に一池ありて血池と呼べり、この踊りの遺物なりとぞ」(22) 血の池は『播州名所巡覧図会』(1804)にも描かれているが、祭りに武器を持ち出して踊りを行うさまは、祭りの様子を描いたものによく表れている。明治期には廃れたこうした行事を紹介する理由はよくわからない。また、赤松氏の時代に始まったものを徳川の世でも続け

て行っていたのか、もしくは時代が経つごとに内実が変わっていったのか、そのあたりも不明である。とはいえ江戸期の生活習慣や村人の暮らしにかかわる説明が少ない中で、修羅踊りへの言及は江戸期の村々の人々の生活を垣間見させるものと言える。

長壁神社 城内に合った社を総社の正面に移動した旨が書かれており、祭神は「姫路刑部大神」である、と紹介されている。刑部姫についての様々な異説が列挙され、次のように書かれている。「維新前までは藩主を始め、市民一般に厚く崇敬して、不思議なる霊徳を備へ、常に姫路城の最高所に座して、そを守護し給へる神なりと信ぜらりき」。

十二所神社 場所は「旧飾磨門の西に当り、同名の町内にあり」、と説明されており、外濠の門の名残もまだあった時代と分かる。「例祭は陰暦九月九日所謂節句祭にして屋台など出て賑はし、境内に阿菊の社あり」とある。現在はこうした賑わいの面影はないが、かつては藤の名所としても人気があった場所である。

その他取り上げられている神社には、案内者、山王社（日吉神社）、姫路神社、白川神社、粟島神社、高丘神社、荒川神社、兜山神社、三和神社、山井村大歳社、男山八幡者、白國神社、廣峯神社、松原神社がある。これらの神社の説明には、祭神や神功皇后伝説などが登場するが、景観や地誌などの説明はほとんどない。全国の神社を整備し、県社、郷社などの社格を付与した旧制度は、国策としての日本の国教にあたるものを神道として整えたものであり、これらの神社の説明の中に日本神話の神々や天皇の名が繰り返し現れるのもそうした時代背景を表しているといえるだろう。現在、これらの神社の中で観光にも訪れることができるものは数少ないが、本研究では廣峯山を背にした高台にある白國神社をルートに取り入れる試みをしている。

第四章は寺院について書かれており、本徳寺、景福寺、正明寺、慶雲寺、書写山圓教寺、増位山随願寺、牛堂山国分寺、佛日山法輪寺などが紹介されている。現在観光コースの中に登場し観光客の訪問が多いのは、書写山圓教寺ぐらいのものではないかと考えられる。江戸期は栄えた寺院であっても、明治以後は苦しい状態になったものも多いと考えられ、姫路の寺町も何か所かあるが、現在では観光地としての賑わいはない。

第五章巡覧より

第五章は姫路及び近隣地帯の周遊案内であり、第一日から第五日までの周遊経路が書物に残された由緒やゆかりの物語などと共に語られている。地図と共に示されておらず、また道も景観も現在とはかなり異なっており地名も古名である場合もあるので、姫路の地理景観および昔の街路に通じていないものにはすぐには合点がいかない説明も多い。とはいえ、この部分は昔の姫路の人々が親しんだ文化の諸相が描き出されている箇所である点、参考になる記述もある。

以下は、姫路城に最も近い地域を周遊する第一日の内容から、明治期の姫路に見られた文化的事象を紹介する。

第一日目に入る前の前段部分には、駅前から中濠に至る地域の旅館が多く紹介されており、中でも赤松楼は旧藩時代の豪商高原彌太郎の邸宅であった建物ということである。

現在このような建物はほとんど現存しないが、福中町にはこうした高級旅館が軒を並べていた。賑わいのある日として、惣社例祭（十一月十五日）、薬師山の招魂祭など多くの祭りが紹介されている。

一日目巡覧の冒頭部分は総社の総社にある宝物や末社の数々が紹介され、生の松原の由来が語られる。一夜のうちに数百の松が生えたという場所は、昔の岐阜町、現在の医療センター西あたりか。次に播磨十水の一つ「小野江の清水」が紹介されているが、これは岐阜町にあったというが、現在でいうと美術館から図書館のエリアである。秀吉の恩を受けた野里の芥田五郎右衛門の屋敷が地名として残っていることや野里北端の遊郭梅ヶ坪の話が出てくる。遊郭については「明治十年のころ年限を定め官許を得てこの地に創めしなるが、来む春には城南の延末村に移さん筈」と書かれている。野里の北から南へもどり、坊主町に入る。池田輝政時代の城内に使える茶坊主の住んだところと紹介されており、国学者春山弟彦の居宅があった。そこから中濠へ南下して濠沿いを行くと白川神社、そこから船場川を西に渡れば姫路紡績会社がある、とされている。

姫路紡績会社は明治 13（1880）年から操業を始めた綿紡績工場で、兵庫県では最も早くできたものである。動力は姫路藩の水車と八代富士才からの水路を利用していた。明治 18 年には民間に払い下げられ明治 32 年に火事で全焼するまで操業を続けた。初めての洋式工場の運営は、海外の市場との戦いでもあり、利益はなかなか上がらなかったようである。『姫路名勝誌』は明治 32 年 3 月の発行であるが、紡績所の火災は同年 11 月である。明治の中期まで、姫路紡績所は姫路の軽工業を代表する工場として認識されていたのだろう。（『ふるさと八代』124-131 頁参照）

【3】『姫路名所案内』橋本政次編 姫路市 1913(T2)年

編著者の橋本政次（1886-1973）は『鷺城新聞』、『播磨新聞』、『神戸新聞』等で活躍した記者であり、『姫路名所案内』執筆時は弱冠 27 歳であった。後年の代表的著作として『姫路城史』全三巻がある。

この書籍は一般的な観光案内ではなく、姫路の地理や市政から教育など、姫路市の紹介の中に姫路の「名所旧跡」が掲載されているものである。1912（T1）年に姫路市は『姫路誌』という同種の案内を発行しているが、これはその発展版ともいえるものである。姫路市長堀音吉（市長在任 1909-1915）が序文を寄せており、「月明橋本君著す所の姫路名所案内結構整然、用意周到、而も行文流暢、記事簡明、取材豊富、姫路の総てを説て貽すなし」と書かれている。大分県氏族であった堀音吉は、日露戦争後の経済不況に対して、姫路の殖産興業を期待されて市長になった人物であり、工業用地確保のために市域を広げたと同時に、中濠を埋立て国道 2 号線を作ったことで今でも記憶されている。

この名所案内は、姫路城が陸軍省から姫路市に払い下げられ、北側の武家屋敷跡が姫山公園として整備され公開された時期に刊行されたものであり、城を中心とした周遊や

観光を促進する意図があるためか、景観のすぐれたところを詳細に紹介する部分が多い。観光案内として見た場合の特徴としては、冒頭に姫路市各地の建物や風景が写真として掲載されていること、そしてこれまでの時期に発行された名所案内にはあまり掲載されていない場所が紹介されていることである。こうした場所と名前は、史実としての正確さはともかく物語と共に語られることで、その場所の面白みを増す仕掛けを持つものであり、「姥が石」や城内の「お菊井戸」などがそれにあたる。当時の姫路城プロモーションの一つだったと考えられる。

もう一つの特徴として、観光案内の文章の中に、和歌や漢詩が差し挟まれ、文学的な趣味を醸し出していることである。これはこれまで刊行された観光案内にはあまりなかった趣向であるが、姫路をうたった和歌などを知ることが出来る点で貴重と言えるかもしれない。こうした物語化や文学化の傾向は、著者が『鷺城新聞』などで活躍し三木露風などと共に鷺城文壇を形成した一人であったことも影響していると考えられる。

以下には、冒頭の大正初期の建物や景色の写真の場所、およびこの名所案内で初めて取り上げられている、もしくは初めて詳細が紹介されているスポットを中心に紹介し、若干のコメントを付す。

<冒頭に紹介されている写真>

・姫路市域パノラマ写真、西の丸

・姥ヶ石、腹切櫓、お菊井戸　これらは史実に基づいた史跡ではないが、現在でも観光案内などには「このように伝えられているが・・・実は史実ではない」といった紹介のされ方をしているものである。

・姫山公園　現在残っているより大きな池が見える。侍屋敷のエリアなどを公園に作り替えたところでは、西洋式の開かれた「公園」に作り替えることが難しく、どうしても曲線を伴った通路や木々がうっそうとして見渡せない状態が残る場合が多いが、この姫山公園も同様である。同じページにある「路山古墳」は詳細不明。

・射楯兵主神社　広々とした門と鳥居が映っている。「不明橋畔の蓮」「血の池の桜」と、花の季節には美しいさまが紹介されている。「不明橋」元塩町から北へ参道を進んだところにかかっていた。

・長壁神社、姫路神社、どちらも城内にあった以前の姿で映っている。

・お夏清十郎の墓（場所明記されず）

・姫路図書館　国学者の春山弟彦の春山文庫に始まる姫路における図書館の設立が、総社境内に移設され「姫路図書館」となった（1912年）直後の図書館の写真である。この図書館は1940年には1万8千冊の蔵書があったということであるが、空襲で焼失したと考えられる。

・阿菊神社実物木像、十二所の藤、十二所神社、阿菊神社、阿菊神社実物具足皿

十二所神社とお菊の伝承をひとまとめにして写真で提示している。お菊の木像や皿までもある、というのが、姫路の紹介のついでに物語を楽しむ姿勢がよく出ている。大正

初期までは十二所神社の藤は名所であったことが分かる。

- ・ 榊原忠次の墓、増位山随願寺、芭蕉翁墓、増位温泉全景、素麺滝

増位山から白國にかけての名所の紹介である。増位温泉は明治 29 年に開業したもの。

- ・ 白國梅林 溜池の周りを取り囲むように梅の木が花をつけている。

- ・ 鷺の清水 井戸が写されている。

- ・ 白川稲荷 坊主町にある白川神社 現在とあまり変わらない。

・ 河合寸翁の墓所 山の中の場所が映っている。姫路市兼田から仁寿山方面へ上ったところにある。管理者がいないためか、墓石の表面が削り取られているものもあるなど、現在は荒廃している。

- ・ 二階町筋、西魚町花街、梅ヶ枝町遊廓

二階町は店屋が立ち並び人力車が行きかう様子が映っている。魚町は戦前多くの芸妓がいたが、写されている昼間の様子は閑散としている。梅が枝町の遊廓が軒を並べて立ち並んでいる。この地域現在、戦前からの若干の家屋が残っているが、写真に写っているような光景はすでにない。

・ 姫路中学校（二階建て木造）、姫路師範学校（二階建て）、姫路高等女学校（二階建て、姫路商業学校（一階建て白壁の日本家屋）。これらの他は、市役所や軍隊の建物、税務署など行政施設の写真、日本赤十字社神戸支部姫路病院などがある。

また、写真ではないが広告も多く掲載されている。白國の養蜂園、福中町や西二階町の呉服屋、材木町の醸造元、元塩町の銀行、梅が枝町の明珍本舗、現在の山陽電鉄姫路駅周辺の南町にあった素麺同業組合など、当時の商業の様子が分かる。また、高砂染めを扱う東二階町の呉服店の広告もある。

<名所旧跡 48 頁より>

姫路城 天守からの眺めのすばらしさを叙述し、腹切り丸、姥が石などの物語化した姫路城の見どころの紹介のあと、赤松氏の最初の築城、嘉吉の乱による没落と、その後の再興および小寺氏の統治および黒田官兵衛の秀吉への恭順、秀吉の播磨攻め、天正八年の秀吉による三重の天守築城、という定番の流れで城の歴史が語られる。池田輝政の入府と姫路百万石、そして本多氏、と続く。この紹介で特徴があるのは千姫に関する記事が多いことである。千姫は「大手門の内構に武蔵野と称する宏大壮麗なる館舎を営み」、その西方に「楼台を起し」菅原道真を男山に祀り拝礼したとのことである。人々はこの楼台を天樹院丸と呼んだという。その後の歴代城主は簡単な紹介に終わっている。

姫山 「此の山は往昔富姫の館舎なり」と、富姫伝説が語られている。「播磨大領角野某の娘」であり、「第四十九代光仁天皇の御采女」であったが「天皇の寵止みて播磨に帰る」とある。八世紀の播磨がどのようなところであったか、史実として確証できることは少ないかと思われるが、このような説明にも史実より物語を重視する傾向が見て取れるだろう。

大工源兵衛の墓 「清水門の内にあり」とあるが、実際は違っているようである。これ

も物語と実際の場所とをつなげようとする作為によるものか。大工源兵衛が城の傾いているのを悔いて死んだという話は伝承かもしれないが、築城が人を殺したという物語のモチーフは、その後徳川の治世の間に何がしか抑圧されていたとも考えられる。築城による死者の話が、あくまでも城づくりに奉仕しようとする大工源兵衛の姿に転化したものだろうか。

鷺の清水 「古来有名なる名水」と紹介され、本多時代の逸話が語られ、「さては名水なりとてそれより水辺に石畳を敷き、上に覆屋を設け、流しには三河国より八橋の杜若を取寄せ植うるなど秘蔵限りなかりしと云ふ」とその後の様子を述べている。赤松義祐の歌が添えられており、「鷺の水昔ならばや五位の鳥いかでいなかに住みははつべき」とある。五位鷺の名の由来は、『平家物語』にあるもので、醍醐天皇におとなしく捕獲されたことから宮中に上ることのできる最下位の五位を賜ったという話からである。現在でも清水門の横を流れる船場川には時折ゴイサギが飛来する。

射楯兵主神社 「旧城内にあり」として、当時の南から入る経路を説明している。「元塩町の中央に参詣道あり、湟池に反橋を架す。夏季は池塘の紅蓮白蓮を賞すべし、橋を渡れば不明門（あけずもん）の址ありその内よりは神寂たる廣前にして正面に大石鳥居あり。」現在ではこの光景を想像することも難しい。宝物が記されており、「木下藤吉郎寄付の制札、小寺職隆寄付の拝殿棒札、宮本武蔵自画奉納角力の絵馬、赤松政村寄付の大釣鐘、榊原式部大輔寄付の臨時祭巻物等あり」としている。これらの景観と宝物が現在も皆揃っているのであれば、姫路城近隣の観光資源も豊かであったはずである。

射楯兵主神社内にある神社、名所等

案内社 「桓武天皇の延暦十八年の勧請」とのこと。

招魂社 「児島範長および明治維新の際王子に盡したる河合宗元、河合屏山ら十二名の志士を祀る」とあるが、明治4（1871）年に志士の八柱を祀ったのが始めである。その後、日清、日露の戦死者も祀られていたことがあったようである。（『安寧』参照）。

道辻の社 現在では道祖者と呼ばれている。これは石の塚であり、前を通る時は、男女の営みの真似をして通るといふ。「年の末には男女陰形の供物をなし、里民の男女未婚のものは打ち交わりて此の拝殿に入り戸を閉じて縁を結びたり」といふ。こういった風習はすでに亡くなっていたようであるが、西日本には類似の風習があったと伝わっている地域もあるので、姫路での農村の風習であったと思われる。

血の池 ここでは修羅踊りなどは紹介されていない。代わりに、池の周囲の景観のすばらしさを次のように述べている。「池畔松蒼く、春や八重桜、鬱金桜咲き乱れて黄雲彩霞 霰隼として池水に映ずる其の景趣凡ならず」とある。

鬼石 「酒呑童子の変ぜし石」と伝わる。現在も境内にあり。

長壁神社（富姫社） 当時は元塩町総社入口にあった。明治12（1879）年長壁神社、富姫社が合祀された。

虎屋御坊（姫路七不思議） 上城金町にあり、亀山本徳寺子坊とある。姫路七不思議の

ひとつとされる。「上にあつて下三宝、下にあつて上三宝、横に堅町、町に国府寺、寺に虎屋、南にあつて北条門、木で作つて竹の門、以上七つを数えて姫路の七不思議と云ふ。」地名の面白さを頓智のように並べたものであるが、当時の市街の人々が古くからの土地の名への愛着を持って暮らしていたのがよくわかる。その他、十二所神社、光源寺、幡念寺、願入寺、善導寺、妙国寺、妙立寺、正明寺、雲松寺、などが紹介されている。

増位温泉 当時の新しい温泉地で観光開発の一つとして設置されたもの。「増位山麓にあり、明治二十九年十月会社組織にて設立せしものにして、胃腸病、神経病、肋膜炎其他の諸病に効能あり、庭園瀟洒、眺望佳絶、料亭、旅館等あり設備遺憾なし」とある。

東光寺 「飾磨郡城北村の内八代村にあり」とある。「伏見天皇御創始」、その後戦乱の為寺は荒れたが、「赤松円心当寺を尊崇し仏閣僧舎を再考し」とある。しかし戦国時代に入り寺は消失、池田輝政が「遊息の花園」を作つたという。伏見天皇の離宮という言葉伝えを尊んだものと考えられている。ここを御茶屋と呼び、その後の城主も利用したが、酒井氏の入府とともにこうした風習も消滅した。(『ふるさと八代』76-77頁)

八代八景 御茶屋の周りは八代の村であり、明治初年まで一面の田畑にあぜ道が伸びる景観の場所であった。ここでは八代八景として短歌が紹介されているが、姫路八景、男山八景、船場八景、青山八景など、景色を短歌などの言葉で表してその土地を語るという趣向は、当時よく行われていた。

1-2 その他の収集資料一覧 (年代順 出版地、出版者を併記)

資料の概略に加えて、姫路や近隣地域に関する記載事項を付記している。

1) 1882 (M15) 『大日本道中記』 樺井達之輔編 京都

全国の列車、街道の宿場などを網羅したもの。当時はまだ姫路に列車は来ておらず、姫路は「大阪ヨリ姫路松江通り出雲大社」(五十丁) というところに登場する。革細工が名物として記載されている。

2) 1884(M17) 『新大日本帝国道中記』 松井与兵衛編 東京

1) と同種のもの。全国の街道を網羅している。姫路は「西京より下関まで」というところに登場する。増位山、廣峯山を背景にした城の「姫路景」が差し込まれている。

3) 1884(M17) 『内国旅行必携』 伊東武左衛門編 東京

1) 2) と同種の道中ものであるが、全国を結ぶ街道の地図のみで構成されている。姫路の東には「ソネノ天神」と「石の宝殿」の文字が書き込まれている。姫路の西の宿場は龍野の東、伊保川に沿った正條(現在の揖保川町正條)である。

4) 1889 (M22) 『改正道中記』 井上勝五郎編 東京

3) と同種のものであるが、姫路の東は龍野の伊保川沿いの「橋崎」となっており、この時期までは船で北上していたか。倉敷駅が出来たのは明治24年、広島まで開通したのは明治27年である。

5) 1889 (M22) 『大日本汽車名所独案内』 樋口正三郎編 大阪

「姫路ハ播飾東郡ニテ山陽中の都会地なり。兵庫県所轄にて官衙を設け大阪鎮台の文営有り。飾万津の港ハ西南に位し市川ハ市坊の東に流れ。伊和神社、刑部神祠、姫山、慈恩寺、姫路寺等有名なり。書写山二里なり。」本文冒頭「東海道発仙台神戸姫路間汽車名所」の中にある。

6) 1892 (M25) 『姫路新繁盛記』 片岡三千次 (凌雲) 著

姫路の町の風俗や名所を戯作文調で語った案内。第二編として「芸妓評判記」と題し、姫路の芸者等の品定めが書かれている。劇場の紹介もあり、萬松座 (坂元町)、養気座 (西二階町)、末廣座 (上寺町 内部廃顔につき閉店) など紹介している。先に魚谷敏次の『姫路繁盛記』が刊行されている旨が冒頭にあるが、その書については未見。

7) 1903 (M36) 『日本漫遊案内』 上下 明文館 坪谷善四郎編

下巻 266 頁から姫路市についての案内がある。「五層の城楼は今尚ほ停車場の北に聳えて」と、停車場から、街道筋および鉄道の便を説明している。中国街道が東西を貫通し、北へは但馬街道、西北へは津山を抜けて米子街道、西北は因幡街道、播但線は北は但馬の生野から新井へ、南は飾磨津へ、という具合である。書写山圓教寺が紹介されている。

8) 1914 (T3) 『鉄道旅行案内』 鉄道省編

鉄道省の編纂による全国の鉄道沿線の名所案内である。主に名勝や景観の優れたところを紹介している。姫路については 117-118 頁に言及があるが、至極簡単なもので、明石から岡山までの間の海岸の景勝地を紹介する間に姫路市の名所がいくつか書かれている。麻生山 (播磨富士)、姫路 (播但線の分岐点、元酒井氏の城市)、「城は嘗て秀吉の築いた世にも名高い白鷺城」とあるが、池田輝政の名が消えているのが奇妙でもある。

第二章 姫路市内調査報告

- 2-1 姫路城近隣
- 2-2 白国地域
- 2-3 野里地区
- 2-4 魚町・二階町

Google map©2022



令和3年10月から12月にかけて、姫路市内のルート調査を行った。主に姫路城から徒歩もしくはバスを利用して散策できる地域を対象とした。以下の調査報告では(1)経路の詳細、(2)景観の特徴を記し、(3)歴史、についてはどのように歴史との関係をそのルート散策によって楽しむか等を記した。これには、第一章で検討した明治期から大正期の観光案内に書かれている内容や、それ以前の伝承、現在の観光案内への取り入れられ方からみる歴史性の認知度なども勘案した。(4)として、観光ルートとして考える場合の改良すべき点について、学生の意見も参考にしながら考察した。

2-1 姫路城近隣 (姫路城水域、鷺の清水を中心とした散策路)

姫路の旧市街のエリアは、古くから水のよい所として伝わっており、船場八景、八代八景などの言葉とともに現在にも伝えられているが、実際にはその面影を見ることができるところは少ない。このルートはかつて水の豊かな城下町であった姫路を紹介し、水

の眺めと共に散策を楽しむものである。鷺の清水は現在北背隠門のそばに井戸の遺構のみ残っているが、江戸期には有名な湧き水であり、茶人はこの水で茶をたてたとも伝わっている。この経路はこの鷺の清水を起点として、姫路城の周囲を回る道を紹介するものである。江戸期の濠割のほとんどは、内濠から中濠の一部を除いて残っておらず、船場川の流れも江戸期とは異なっている。



Google map©2021

● 鷺の清水

⊘ 散策路の起点、終点（東から兵庫県立歴史博物館、好古園入口、千姫の小道）

とはいえ、北部の山々や山腹から南へ流れてくる川は姫路の地下を伏流水で満たし、それが現在でも様々な形で残っていることも確かである。今回経路には含んでいないが、明治期以降の人口増加と上水道下水道の整備の遅れから、飲み水の水質が非常に悪くなった時期に、新しく水道を引くために開発された町裏浄水場（昭和4年竣工、姫路市八代）は、湧き水を利用して現在でも現役である。この浄水場の建設は、姫路城北部中濠に面した坊主町に隣接しており、城内にも井戸を持っていた姫路城を含めて考えると、水資源は今なお豊富なのではないかと思わせる。

（1）経路 好古園前と鷺の清水を結ぶ線を中心とした、城廻りの経路である。以下は、経路とその地点の写真である。鷺の清水を起点としても、県立歴史博物館の方から歩いても、散策の内容は同じとなる。



好古園前のバス停でおりて、東側を北に延びる内堀沿いに歩く↓

←好古園前 下好古園東の内堀景観



この道は景観がよく、桜の時期には石垣を覆う桜の花が見られる。秋から冬はすぐに陰ってくるので、午後3時ごろまでが散策によい。

歩いていくと、石垣を折れ曲がって右に抜ける路に出る。



↑北背隠門 南から見た様子 右の写真の道を北にあるくと出てくる。このあたりにも案内板がないため、目的地が明示されていないことになってしまう。



姫山公園の中に入る。このあたり木々がうっそうとしており、案内版がなくしばらく方向が分からないような印象を与える。



男山と姫路城の間を流れる大野川と船場川の合流地点。川底からは水が湧いているところがある。写真左手に歴史博物館への道路があるが、右手に橋があり小さな四つ辻が隣接しており、近くから天守は見えないため、初めて訪れた学生は方向をすぐにつかむことが難しかった。

↓千姫の小道の入口付近から鷺の清水方面を見る。

普段通行するのは殆どが地元の人かと思われる。道は整備されており、ところどころ段差があるが、おおむね問題ない。



→北背隠門から県立歴史博物館へと向かう道。二車線道路の脇を歩く。内堀および北側の天守の様子が見えよく観察できる。

↓鷺の清水（正面奥）手前に地図と案内があるが、字が小さく近くから見れないため利用できない。



船場川にはシロサギ、アオサギ、ゴイサギなど各種の鷺が生息している。写真はシロサギ。



二車線の道に行く歩道は街路樹のために地面が盛り上がったところが多く若干歩きにくい。しかし景観は良好で天候のよい昼間であれば良い散策道である。



←千姫の小道、川沿いに南へ

北背隠門を入れて東へ行き姫路神社へと抜ける路もあるが、カラスが多いこと、姫路神社の境内が狭く人も少なく鬱蒼とした印象があるため、観光ルートとしてはお勧めではない。

(2) 景観

このルートの全体的景観はおおむね良好である。特に好古園横の内濠に沿った道は、四季折々の表情を見せる城の景観としても推奨できるものである。鷺の清水からは城は見えにくいですが、船場川を少し上ると城が北西側から見える。この城の景観は正面や東側から見る城とは異なっており、城の眺めの一つとしても推奨できるだろう。姫路城北側を濠沿いに二車線道路の横を歩く道は、途中からほぼ直線であり一見単調であるが、城の石垣や城郭建築についての知識があれば景観として楽しめる部分も多いと考える。シロトピア公園が開けている場所までいくと、姫路城の全体が見える。船場川沿いの景観は、時折川の中に家庭ごみが流れ込んでいることがあり、特に城西78号線に出るあたりではごみが堆積している場合があるのは問題だろう。

(3) 歴史

歴史的に見れば、このルートの道のほとんどが、戦前の姫山公園の整備に始まり、戦後の好古園開設に伴う整備事業とともに作られたものである。この点では、歴史的街道を歩くものではなく、現代的な遊歩ルートということになる。このルートにある景観地点における歴史を感じるものとしては、城および石垣、濠の眺めが中心となっている。城の内濠の西側や北からの眺めなどは、古くから人々に親しまれたものでもないため、姫路の代表的景観と言えるかどうかは分からないが、姫路城に登城し、歴史を知ったうえで散策するのであれば、見ごたえのある経路であるとはいえる。なお、姫山公園およびシロトピア公園の植林が特に特徴のあるものではなく、かつて城内に多く生えていた松林もないため、城を取り巻く景観としては特段印象を与えるものとなっていない。

(4) 改良すべき点

以上、経路を調査した結果、「姫路城水域、鷺の清水を中心とした散策路」において改良すべき点として次のものが考えられる。

・初めて訪れた人にも分かるように、地図および主要な施設、史跡などへの経路を統一的に掲示すべきである。経路の表示の時期は昭和から平成まで様々な時期に行われていると見られ、字体や表示のデザインなど統一されていないので、経路を示されているかどうか一目で分からない場合も多い。また情報過多で字が小さい、行きたい場所、

代表的な場所が書いていない、その場所がどこであるか示されていない（北背隠門が代表的）という場合も散見する。観光地案内の表示という基本的な整備が十分でないことは、せっかくの観光資源を無駄にしているともいえる。

・観光客が訪れることを前提としている場所には、ゴミや鳥獣が遊歩の邪魔となるようにしないほしい。船場川の清掃は定期的に行い、千姫の小道からゴミが見えないようにする、姫山公園にカラスなどの鳥獣が大量に群がることのないようにする、ねこのエサやりを禁止する等の環境整備が必要である。

2-2 白国地域

白国地域は、西国街道ができる前の奈良時代に、京、大阪と通じる古街道が通る地域であったと伝えられており、古くから集落があった。稲背入彦命が針間（播磨）平定の際、居住地としたという神話もある。播磨国風土記には「新羅訓」（しらくに）というのは新羅から来た人々が住んだからである、という記述もある。このように姫路市街の中でも非常に古い来歴をもつ地域であり、『延喜式神名帳』には播磨国四の宮に列せられ、陽成天皇（869-949、在位 876-884）の際には正五位を賜っているということから、平安時代、荘園のあった時代には特に重要な場所であったということだろうか。

白国地域を訪れる際、まず訪問すべきは白国神社である。この神社は南に向かって開かれた山腹にあり、境内に上ると南面に開けて明るい。きれいに整備された境内には神社のスタッフが常駐しており、おみくじやお札が売られている。姫路市域の神社は、総社のように戦災のためにその境内の領域が大幅に縮小されたものや、日吉神社のように神社に常駐する者がおらず半ば廃墟のような趣になってしまっているものなど、江戸期や明治時代の様子がもはや想像しにくいものも多いが、白国神社は地域の人々が昭和時代以降に様々な保存事業や記念行事を行い、現在も良好な境内環境と景観を保っている。（白国についての事項は、適宜『ふるさと白国』を参照した。以下同様）

（1）経路

白国地区まで行くには、神姫バスで白国口まで行き、そこから徒歩となる。バスの便は良いとは言えず、タクシーか自家用車を利用の方が便利である。とりあえず白国神社を目指すことになるが、バス停付近には地図や案内板がないため、しばらく北へ山の方へむかって上り坂を歩かなくてはならない。しばらく上ると、白国神社への案内板が見える。また、距離が遠くなるが、JR野里駅から徒歩でもこの地域に来ることができる。



Google map©2022 白国口バス停を降りる



少し歩くと西側から入る道があり、→
ここを行くと参道に出ることができる。
もう少し上にも参道に入る道がある。

←白国口のバス停。向こうに見えるのは
増位山である。この道を山に向かって少
し歩く。



弁天池の方から入る

↓正門には正月の飾りがなされている。
門の中には人形飾りが置かれており、人
形の様子もしめ飾りも美しい。



↑神社参道

↓境内の近くには弁天池があり、この池
の景観は長閑である。



池のほとりに下記の案内札が立ってい
る。「白国廃寺跡と亀井寺－弁天池の中
に弁財天を祀る小祀があり、付近に布目瓦
が散布している。出土した古瓦から奈良



お正月の人形飾り

時代の寺院跡と考えられる。『峯相記』に白国山麓に山陰中納言の建立した亀井寺があったことが記されている。昭和52（1977）年弁天池の堤防修理と同時に小島はコンクリートでとり巻かれ、弁財天の堂もなおされた。毎年四月二十九日を祭祀日（弁天祭）として、農区の人々により祀られている。」

白国地区の散策は、白国神社の参拝と弁天池の周りを散策する、といったところであるが、山登りに挑戦したい人はここから山へ向かって廣峯に上ることもできる。明治期の案内には廣峯神社への行き道を書いているものが多いが、現在では徒歩で上る人は少ないだろう。白国神社の他には大年神社は徒歩圏であり、隋願寺へのドライブウェイ沿いに向かってその近隣を散策することもできる。

（2）景観

白国地区からの景観として、ランドマークとなるものは増位山および廣峯山である。とはいえ徒歩での散策においては、弁天池と白国神社の境内が地理的な見当を与えてくれるものとなっている。民家の間に田畑が点在しており、観光地というイメージは全くない。しかし姫路の古い歴史を伝える場所として、歴史的な知識とともに歩くのも、面白い散策の一つの形である。

明治期の観光案内には、必ずと言ってよい程紹介された白国梅園であるが、終戦期を過ぎると消滅してしまった。現在隋願寺には小ぶりではあるが梅園が作られている。その地域にゆかりの木々を植えて公園にする事業は各自治体で行われているが、白国地域と梅という土地の景観を復興する取り組みも地域おこしとして考えられるだろう。

（3）歴史

白国地区の歴史を掘り起こすとすれば、八代のあたりから北の地域に広がっていたと考えられている荘園と古街道について、史料や伝承を整理することがまず考えられる。残念なことに姫路地域の荘園については詳細な文書が残っておらず、したがって歴史的な研究もほとんど行われていない。しかし『峯相記』や『播磨国風土記』などに残っている伝承から、様々な言い伝えを整理することは可能であろう。『ふるさと白国』にも若干の伝承が記録されている。

（4）改良すべき点

バスの便が少ないのが残念であるが、現在のところ一時間に1～2本の運行状況で仕方ないかもしれない。バス停の付近には案内板などある方がよい。観光というより、姫路城周辺地の歴史散策といったことになるだろうが、そのようなルートとして案内するとしても、白国にまつわる歴史的な出来事や事跡が十分に整理されていないことは改

良されるべきだろう。中世までの白国地域を通る街道や居住した人々、荘園との関係など、さらなる研究が待たれるところである。

2-3 野里地区



Google map©2021

野里地区は野里街道を擁する旧街区と、坊主町の旧武家屋敷地区からなり、野里商店街東側に広がっている。古くは鋳物町として知られ、明治初期にも職人の多く住む町として記録されている。野里商店街の北に明珍火箸で有名な明珍本舗がある。明珍の鋳物師一族は初期の姫路藩の甲冑師として坊主町にいたことが当時の地図で分かるが、その後野里に移ったと考えられる。

この地区は古くから町おこしが盛んで、さびれてい

く野里商店街をどのように活性化すべきかといった議論が長く行われ、2000年代には街づくりの組織も出来ている。その一つの成果と考えられるのは、住宅地が増えシャッターが閉まったままの商店もある中、街道に面する家屋の道に面した側のテクスチャや色目などは一定のトーンを維持しており、街道の道路がアスファルトではなくブロック系の舗装となっていることなどから、散策にも向いた作りとなっていることである。

現在の野里商店街の街路の景観は、虫籠窓の家屋が点在しており、かつて商家が並んでいた風情を思わせるものの、多くは住宅であり営業している飲食店と商店がところどころにある、といったものである。観光客がショッピングを楽しむといった街路ではない。野里商店街の街路を写真に取ると、虫籠窓の家屋はともかく、そうした伝統的意匠を持つ家屋も一般の住宅に挟まれて、特に特徴のないものと映ることが多い。しかしこの散策道の一番の特徴は、街路の幅が昔の旧街道の幅であり、人が歩いて進むためのちょうど心地よい広さになっていることである。また、歩いている際に目に入ってくるものは、絵画的に美しい景観というよりも、人の歩みに合わせて趣を変化させていく、シークエンスのあるヒューマン・スケールな景観というのも特徴である。

(1) 経路

経路は、野里門、もしくは姫山公園北のバス停で下車し、北に向かい、野里郵便局の北側の向こうを右（東）に入る。右側の道路を東へ入ると、左に折れる路があり、そこが野里商店街（野里街道）である。西に南北に並行して走る道路は、明治になって明治天皇の送迎の為城北練兵場（今の自衛隊基地）への道として開かれたもので、「新道」と呼ばれた。野里地区は江戸期から町屋や商店が多く立ち並ぶ人口集積地であったこともあり、街路が細かく車での通行は総じて難しい所である。



Google map©2021

商店街への標識はない。



商店街の中の説明版

↓野里門バス停から少し北のエリア 野里商店街へは道を渡る必要があるが、信号がなく往来は激しい。姫山公園北で降りて、東側に横断歩道を渡り北上する方が良い。



上の写真の右手には姫路市立図書館がある。野里門の遺構はほとんど残っていない。



Google map©2021

道幅と家並みのスケールのバランスが良い道である。



虫籠窓の家。このように何軒か残っている所もある。車は北から南の一方通行で（写真では右側）、普段あまり通らない。



野里商店街を北へ行くと、慶雲寺に曲がる角がある。写真は慶雲寺の門。



慶雲寺の敷地内。



慶雲寺の敷地内



お夏清十郎の墓。以前よりきれいに整備されている。

(2) 景観

先に述べたように、野里地区は生活景に特徴がある。街路が狭いため、古い商店の店構えや、寺院の近景、の間に家屋が挟まって立てられている。玄関先の花や看板や店先の様子を見ながら歩く楽しみのある道といえる。

(3) 歴史

野里地区は中世から集落があったようであるが、町としての形ができ始めたのは豊臣秀吉が三層の天守を築いたときからと言われている。その後池田輝政の城下町の整備にともない、威徳寺町、野里寺町、鍛冶町、鍵町、河間町などが出来ている。昭和の頃には現在の野里門バス停の近くに江尻病院、坊主町と河間町の間、西側にスーパーがあり、野里商店街も含めて賑わっていた場所であった。

⇒景観と歴史：野里地区で特徴的なものは、歴史的な景観の集積が街路に見られることである。江戸後期から明治期の虫籠窓のある商家の建物、昭和の趣のある閉店してしまった日用品や電化製品の店、レトロな趣の喫茶店だった洋風の小さなビル、スクエアな概観のモダンな最近の住宅など、ここ百五十年くらいは有に時間幅のある景観としての

集積が見られるのである。まさに、「時代ごとの『風景』を積み重ね、地域の歴史的文脈や共通の記憶を宿した『景観』」（『風景学』 31 頁）が野里地区にはある。一見新しい家に建て替わっただけと見える場所でも、それが古い街道の中に人々の暮らしとともに景観を構成しているさまは、姫路という町の歴史を人々の暮らしから理解するためのよい事例である。

（４）改良すべき点

野里門のバス停から野里商店街へ入る場合、陸橋を通ることになるが、古いうえにバス停から少しあるので、通常道路を横断することになる。しかし交通量が多く、時には危険な場合もある。これを回避するためには、ひとつ前のバス停を降りて信号機のあるところを東にわたることになるが、そうすると野里郵便局のところから歩道がなくなり、車がすぐ横を通り過ぎるところを通過しなければならない。通路に非常に狭小な部分があることは改良すべき点である。

次に、街路のどこを見ても野里商店街がどこか、バス道路から見えるようには書かれていない。陸橋の西側に案内版があるが、古いもので地図も見にくい。昭和の時代にはスーパーもあった地区であるが、そのような街区の変化をうけて、野里商店街へ人々を案内する指示板は設置されていないように見受ける。

歴史的由来をどこまで看板で知らせるかとはともかく、西側の往来の激しい南北道側から、商店街の位置や寺や事跡がどこにあるかわかりやすく示す案内標識が必要である。

商店街には数件飲食店があるが、不定休である、夕方4時ごろには閉まってしまう、といった店が目につく。散策をする人向けの無料の休憩所などを、公民館のあたりや空き家などなどを利用して設置するとよいのではないか。

2-4 魚町・二階町

（１）経路 魚町通、塩町、立町および周辺の通りの東西歩き。



魚町通 昼間には人がほとんどいない。開店している店も少ない。



長壁神社 境内はなく外から見るだけである。光仁天皇の皇子刑部親王と其の王女富姫を祀る、とある。



大蔵前公園の脇の船場川にかかる歩道橋。
川べりにはごみが散乱していた。



左の写真の近隣の整備されていない場所

(2) 景観

ほとんど飲食街かその他店舗である。

(3) 歴史

明治期には福中町が一番の繁華街で、街歩きもここから出発する経路が書かれている(『姫路名勝誌』)。いわゆる内町といわれる街区の中心的な場所となる。立町には長壁神社が分祀されており、ゆかたまつりの中心となっている。大手前通りができる前のかつて姫路の町は、この内町を中心ににぎわっており、人々は東西の通りを行き来して生活していた。

(4) 改良すべき点

昼間の街歩きを想定して調査したが、飲食店街は荒涼とした雰囲気、人影もほとんどなく、大倉山公園付近では、ごみが散乱し土地整備も行われていない状況であった。学生たちは「変な雰囲気だ」「良くない」といった感想をもち、このエリアの街歩きは紹介できないと結論づけた。

映画館があり、昼間も人が行きかっていた時期もかつてはあったと考えられるが、2020年、2021年の新型コロナウイルスまん延により、飲食店街の景色は大きく変わったのではないかと推測できる。ごみの散乱などは、関係者のモラルの問題もあると考えられるが、コミュニティの互助機能も働いていない可能性がある。今後このエリアが今のままの状況であると、姫路市のイメージの悪化にもつながるのではないかと懸念される。

第三章 和歌山県 わかやま歴史物語 100 ルート調査報告



和歌山歴史物語HP トップページ
Copyright © Wakayama Prefecture.
All Rights Reserved.

HPの更新も順次行い、情報のアップデートを行っている。「わかやま歴史物語 100」にはスタンプラリーもある。1つの物語に特定した周遊でも楽しめるように作られており、「歴史物語 100」のホームページは和歌山を歴史とともに紹介する総合サイトともなっている。

今回の現地調査では、徒歩で回るストーリー007の「築城当時は真っ黒？白亜の大天守閣和歌山城と其の城下町」、および車も使って和歌山城を起点に回るストーリー010、「絶景の宝庫和歌の浦！～藩主も惚れ込んだ和歌の浦の絶景～」の二つを実地調査した。HPでは、一つ一つの案内が歴史解説ともなっており、スマホの画面から少しずつ文字情報および写真情報を得て訪ねていく形である。一つのルートをおおよそ回ると、その間に少しずつHPから学んだ事項と、自分が訪ねて実際に見たものが相互に関連付けられるようになり、学習型の観光案内ともなっている。

本研究における目的は、歴史的由緒や事跡に関する物語を交えながら街歩きルートを検討するものであり、同種の試みは各地で行われている。姫路城を起点としたルートを想定した調査と比較できるものとして、城を起点とした周遊ルートを提案している「わかやま歴史物語 100」を取り上げた。「わかやま歴史物語 100」は、2017年頃から和歌山県が推進している県内周遊観光の一つのツールであり、100の物語のあるルートをたどって周遊観光を行うことができる。当初はパンフレットで物語を提示していたようであるが、現在では主にスマートフォンでルートを検索する形に移行している。

2019年8月の『わかやま新報』によると、和歌山県は「水の国、わかやま」、「サイクリング王国わかやま」、そして「わかやま歴史物語 100」などの県内周遊キャンペーンを行っており、県内の各地域の行政機関と県の観光課が連携して観光振興を行ってきている。これらのキャンペーンによって、2018年には和歌山県史上2位の観光入込客数（3462万人）を記録した。残念ながらそれ以後はコロナ禍によって観光客減に見舞われているが、

ストーリー007 和歌山城



Copyright © Wakayama Prefecture. All Rights Reserved.



このような案内板がいたるところにあり、道に迷わない。

モデルコース



Copyright © Wakayama Prefecture. All Rights Reserved.

モデルコースには目的地の簡単な説明がある。見どころの紹介など。

1 和歌山城 (60分)

HPでは、和歌山城のところから地図をクリックすると地図がでる、というようにスマホを見ながら場所を確認することができる。住所、電話、定休日、駐車場台数、営業時間、料金など基本的な情報が一覧で見られる。

2 田中善蔵の碑 (10分)



3 岡山の時金堂 (5分)

4 刺田比古神社 (20分)



規模は大きくないが、神社の管理者も常駐しているようで、境内も整っている。参拝客も数名いた。

6 魚菜八風

7 寺町通

8 和茶緑

ルートには飲食店も紹介されている。

これだけのルートであると、休憩を入れると半日はたっぷりかかる。和歌山城の見学が60分ということであるが、天守からの眺めも良く、天守内にも展示物がある。時間が足りない場合もあるだろう。

5 旧大村家住宅長屋門 (20分)

残念ながら見学は出来なかった。



説明の文書は大部で非常に詳しい。↓



また、近隣には古城跡の岡公園があり、そこは「和歌山城石垣石材の石切丁場跡」と説明されていた。↓



和歌山城入口から近い岡公園 古城跡に建てられ、現在でも切り出した後に残る巨石が多くみられる。

ストーリー010 和歌の浦



Copyright © Wakayama Prefecture. All Rights Reserved.

モデルコース

1. 和歌山城 (60分)
↓車で15分
2. 不老橋 (10分)
3. 三断橋 (5分)
4. 海弾院多宝塔 (10分)
5. 観海閣 (10分)
6. 紀州東照宮 (30分)

2 不老橋 和歌山市の重要文化財である。1851年完成。



不老橋の向こうの山は岩肌の景観が面白い。鹽竈神社がある。



↑三断橋 妹背山に渡る橋。見学は徒歩で簡単にできる。橋を渡った先の観海閣は現在修理中で見学できなかった。

紀州東照宮 1621年創建

↓紀州東照宮へ上る階段



長い石段を上ると、美しく整備された境内に出る。下は社殿の美しい装飾。



↑わかやま歴史館

和歌山の古くからの地元民で鉄砲集団として有名になった雑賀衆について、また第10代藩主の徳川治宝（はるとみ）についての展示が特に充実していた。雑賀衆も治宝も、和歌山の歴史文化に大きな足跡を残している。地元ならではの展示であり、一見の価値がある。紀州藩についてのビデオも流されており、見ごたえがあった。

↓和歌山県観光案内所



和歌山城登城口のすぐそばにある。和歌山県の観光案内、外国語の観光案内などが置かれている。

わかやま歴史物語 100

調査のまとめ

今回の調査では和歌山城を起点としたルートを2か所のみ調査した。ルート散策で、観光地の整備として見習うべきところは、案内板が分かりやすいところに設置され、案

内の内容も 100 物語のルートと照合しており、その案内板に沿った道は快適な歩道が整備されていたことである。

調査した2つのルートは、しっかり見て回ることを考えると1日がかかりとなるものである。和歌山城も中に庭園を持ち、石垣も古いものが残っており見ごたえがある。城内をくまなく見学し、あたりの景色もゆっくり楽しむとなると、見学時間は一時間と書かれていたが、これでは全く足りないこともあるだろう。概して提示されている見学時間は最低の所要時間と考えてよいものであった。

この観光企画のルートの考え方は、すべてをツアーのように見て回るということを前提としておらず、周遊する人が自分で適宜ルート案内を利用して観光する、というものである。ルート内の観光スポットを1つ2つ飛ばしてもよいし、ルートにはないが近隣の見どころとして情報のある場所に行くのもよい。観光をする人が主体的にこの観光ルートを利用してもらう、というスタンスである。

また、HPでは、観光地情報として、歴史的な背景や事跡の説明、地図、ルート所要時間、写真、ルートから少し外れた近隣の見どころなどが一括してリンクされており、地図情報がすぐに出てくるのは大変使いやすかった。このHPは管理業者を公募しており、常に内容のアップデートをする体制を整えていると考えられる。ただし、和歌の浦の経が島が現在修復中で中に入れなことは、HPには記載されていなかった。なお、一つのルートにいくつか飲食店が提示されており、選んで来店することもできるため、こうした情報も便利である。

わかやま歴史観は和歌山城入り口のすぐ近くにあり、城の入場料とセットになったチケットもあるので入りやすい。あまり広くないが、和歌山の城を中心とした歴史をうまく説明しているものであった。

第四章 観光ルート提案

ここでは、第一章から第三章までの資料調査、現地調査、他県の調査（わかやま歴史物語 100）を踏まえて、姫路城を中心とした観光ルートを考察した。先に現地調査を行った4つのルートを検討し、景観や環境整備の面で問題があると考えられた4を除き、1から3についてそれぞれ散策路（もしくはルート全体）のネーミングを行い、主要地点、およびそこへ至る経路を決めた。そして、案内ツールを制作する際に参考にできる故事来歴、ゆかりの人物、地誌などの観光案内ポイントを付記した。これは第一章で検討した明治・大正期の観光案内で取り上げられていたトピックを参考にしている。

【1】姫路城水域－鷺の清水を中心とした散策路

姫路城を訪れた近隣の人々に姫路城の水域を意識した経路を楽しんでもらう。姫路城観光のオプション・ウォーク。

<経路>

公共交通機関：好古園前（神姫バス）

主要地点 ①好古園前 ②鷺の清水 ③千姫の小道 ④男山東側船場川 ⑤兵庫県立歴史博物館

鷺の清水、好古園前の二点を拠点として、千姫の小道、好古園横内濠沿いの道、もしくはシロトピア公園南の姫路歴史博物館への道を散策するルート。船場川と姫路城内濠の水の眺めと共に、水の豊かだった姫路の町を想いつつ姫路城の景観を楽しむコースである。好古園東横の道は、冬場は陰るのが早いので、午後早いうちに散策を開始するのがよい。



<案内ポイント>

- ・鷺の清水 いくつか伝承があるようであるが、何か紹介するのもよいかもしれない。近くの船場川の川底からは現在も少し湧き水があるようである。
- ・清水門と北背隠門の建築図 鷺の清水から湧く水を町人も武士も利用したということなので、門の外側と内側の立体図などあればよくわかる。
- ・好古園のある場所の江戸期（西御屋敷）、明治期、昭和期の様子、そして建築に伴う発掘など、現在好古園のある土地の歴史。榊原政岑と西御屋敷に住

んだという高尾太夫。

- ・映画撮影スポットとしての好古園
- ・千姫と本田忠刻、二人の出会いから忠刻の死まで、西の丸化粧櫓

千姫の人生を語るだけでも話題に事欠かないが、二人の出会いや西の丸化粧櫓と千姫の持参金などの話は、歴史の大きなうねりの中で千姫が姫路に輿入れし、そのために姫路城は西の丸が整備され現在の形に完成した、という過去と現在を結んだ紹介となる。

- ・千姫と男山、千姫の小道の計画（昭和）、千姫天満宮
- ・船場川、かつての船場八景、船場川水域の生態系

姫路の自然については様々な資料があるが、白鷺城というのであるから、鳥類の説明は必要だろう。

- ・姫路城内濠について、姫山公園の整備（明治時代）、シロトピア公園について

【2】白国地域—神々と人々の交わる道

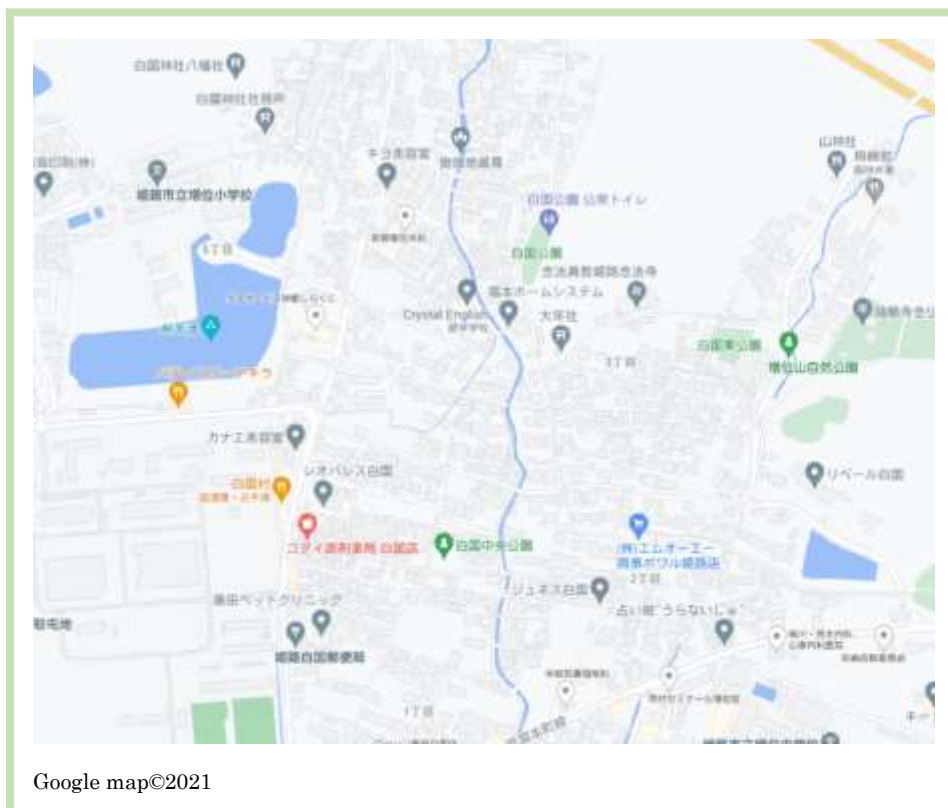
古くから街道が通り、人々が居住していた白国地域の歴史を感じ、増位山と広峯山が背景に広がる景観を楽しむ。歴史探訪。

この地域は姫路城から離れているため、姫路の古代から続く歴史を味わいたい歴史探訪派向きである。白国神社は姫路では最も古い神社の一つで、戦前からの継続的な神社修復等により、現在も境内は美しく整備されている。白国神社参りを目的にするもの良い。特に、白国地域にまつわる歴史を知って訪れるとさらに趣の増す地域と考えられる。

<経路>

公共交通機関：白国口（神姫バス）、野里（JR播但線）

バスの便は少ない。上り坂ウォーキングになるが、JR野里駅から徒歩も可能。自家用車であれば混雑する時期でなければ白国神社の駐車場に停めるのもよい。



主要地点 ①白国神社 ②弁天池 ③大年社 ④増位山自然公園（増位山ドライブウェイ沿い） 神姫バスバス停の白国口から北へ上り、白国神社の参道に出るルートがある。参道を降りて東へ行くと大年社があり、さらに東へ行くと増位山ドライブウェイが北に

向かって伸びている。この道は隋願寺まで行く道で、隋願寺まで登るのは多少苦勞であるが、徒歩でも途中まで散策すればよい。晴天のあたたかい日がおすすりである。

<案内ポイント>

- ・白国の由来（新羅国）、古代の遺跡など
- ・白国神社の祭神と安産の伝説（『播磨鑑』など）
- ・弁天池と奈良時代の寺（廢寺） 弁天池はこの地域に独特の景観を添えているが、池の底には昔の寺の跡があり、亀井寺という寺があったという伝承もある。白国地域の奈良時代から鎌倉時代あたりの伝承や事跡を整理し、このあたりの地誌を語る材料とすると良いかと考えられる。
- ・隋願寺 隋願寺に行く途中の山林の中にも梅が咲いており、寺の境内には小さいながら梅林もある。
- ・消えた白国梅林 この梅林はすでに消滅したが、昭和になって梅林が少なくなったので植樹し、梅の製品を作るなどしていたと伝わっている。戦争に人を取られ、食料もなくなり、梅木の世話をする人がなくなった梅林は荒廃し消滅した。こうした話も地方史の話として提供してもよいだろう。
- ・増位温泉 明治 27（1894）年に播但線が開通したのを受けて、明治 29 年（1896）年、沿線の保養地として開発されたと伝わっている。現在は休業している梅麟館付近に若干の名残を見ることが出来る。（『姫路誌』 姫路市編 1912 年参照）。明治時代の白国を、こうした話題からひも解いて見るのもよい。

【3】野里地域の生活景—一人々の暮らしと記憶がつくる街路の眺め

嘗ては鋳物師が住み、戦後は商店街としてにぎわった野里地域の散策を通して、姫路における良質な生活景のありようを学ぶ。地域の営みと歴史が交錯した景観学習として。

<経路>

公共交通機関：野里門（神姫バス）

主要地点 ①野里門（遺構） ②野里商店街（野里街道） ③慶雲寺

バス停から野里商店街に入るまでは車の往來が多く方向も分かりにくいですが、商店街に入ると案内板が各所にある。良質な生活景の一例として、解説付きで姫路の街歩きとして紹介する等、街並みの学習を含んだ散策コースである。

<案内ポイント>

- ・姫路における鋳物師、明珍本舗
- ・野里街道 野里街道の歴史について、古い時代から商店街となった現在までを説明。
- ・慶雲寺の歴史とお夏清十郎の比翼塚の由来
- ・姫路の町人町としての野里 野里地区は武家町に隣接していたが、鋳物屋や小商売をする店が多かったと伝わる。そうした昔の生活や商いの様子を物語にして伝える工夫もいと考える。



・野里と花街 花街を取り巻く歴史も、江戸期から昭和にかけて色々あったと考えられる。街並みの見学は今では建物がほとんどなく難しいが、知識としては何等か紹介できるだろう。

おわりに

最後に本研究で明らかになったことを姫路市への提言とともにまとめる。歴史ストーリーを観光の周遊ルートに使うという試みは、すでに和歌山県で実施されており、この事例と比較することで姫路の観光のもつ難しさがいくつか明らかになった。

まず最初に姫路城および近隣の観光地としての環境整備である。姫路城の遺構は現在残っているものだけでも広大であり、濠の長さも長大である。こうした巨大さは姫路城の保存や保全に多額の経費がかかることにもなり、おそらくすでに江戸中期には姫路城を管理する人々の重荷になっていたと想像できる。また戦後焼け野原になった経緯も

あるためか、姫路城周囲の土地が必ずしも姫路城の遺構や観光資源としての価値を高めるため、もしくは広く市民の利益となるように有効活用されていない。これは、和歌山城の場合と比べるとよくわかる。現在の和歌山城の北には市役所があり、東には地方裁判所があり、南には県立近代美術館と県立博物館がある。そして西には和歌山県警と県庁がある。城の周りに公共の建物が集約している。姫路では、城の南には土産物屋が立ち並び、北には自動車学校とその西に利用されていない敷地が残り、未使用土地は西屋敷跡の南側にもある。新しくこれらの土地をつかって観光振興に利用することも考えられるが、それよりも喫緊の課題は城廻りの環境整備と清掃である。莫大な予算を使わなくとも、日々の目配りと定期的な補修、清掃等で現在よりかなり改良できるのではと思う。観光地としての環境整備と清掃の計画化によるインフラ整備を提案したい。

○観光地としてのインフラ整備

・清潔な印象、安全な印象をあたえるように、街歩きルートとして観光に利用できる場所はごみの清掃を定期的に行う。濠の周りにカラス、ネコなどが近づかないようにし、水の流れの景観をきれいに（内濠、中濠、城付近の船場川、旧内町街路等）する。こうした事業は観光地としての良好な環境を保つ目的で計画的に行ってほしい。

・案内板の設置について、駅から城の北部エリアの設置場所を総合的に検討する。表記の仕様に統一性を持たせ、字を見やすくする。

- ・姫路城から徒歩圏の見学ができる事跡、史跡に関する建築物などが、老朽化して見苦しい状態となっている場合は、改修する。またそれらの場所への経路にある道路、歩道などが歩きにくい、汚い、歩くには危ない、等の状況である場合は速やかに改修する。(野里郵便局周辺の歩道、シロトピア公園の南に沿った歩道など)
- ・夕暮れになると暗くなり、周りに家屋や商店も何もない場所については、街灯を明るくする、増設するなどする。(市立美術館まわり、姫山公園など)

次に、姫路城にまつわる歴史を統括的に観光客に説明する展示館などのしくみが必要である。和歌山の場合は観光客に対する歴史的な知識の提供は、和歌山歴史館やわかやま歴史物語HPなどで行われている。和歌山では周遊のための観光案内を歴史ストーリーとともに全県まとめて100のルートを作っているが、領域が紀州藩の領地を松阪エリアを除いてカバーすること、県庁所在地に和歌山城があることが姫路城との大きな違いと言える。和歌山は紀州徳川家が長く治めたこともあり、歴史的な名所、旧跡の多くが徳川家とのかかわりを持ち、また徳川家によって守られてきた経緯を持つ。この地域の一体感と城主の一貫性は、姫路と兵庫県の関係には見出し得ない。時代を下るごとに石高が少なくなり、次々と城主が変わった影響か、姫路城の歴史説明をする場合、名所旧跡や各城主への重みづけについてもばらばらになっている印象が強い。その結果、姫路城と関連する歴史的事項は、時と場合によって恣意的に提示されるといった事態にもなっている。このことが姫路における歴史観光の展開を難しくしている面があると思われる。

○城の歴史案内をしてくれる常設の施設の必要性

- ・県、市、文化庁の施設がそれぞれ姫路の歴史についてさまざまに展示しているが、包括的な観光案内のための歴史学習施設が必要ではないか。姫路藩についての歴史学研究を推奨する必要もある。

○県と市の共同による歴史案内のHP開設

- ・和歌山県の事例のように、スマートフォンでアクセスすればすぐにそのサイトからリンクを辿って面的に広がりのある地域の様々な歴史的情報が一覧できる仕組みが必要である。姫路城のサイトは姫路城中心、観光パンフレットのpdfがダウンロードできるのみ、といった状態は改良されるべきだろう。姫路城と関連する事跡や名所を、史実に基づいて簡潔に説明する努力が必要かと思われる。

今回提案した観光ルートは、上記の改良案がある程度実現すると、実際の観光客誘致にも有効な場合が出てくるとと思われる。しかし、現在の状況では観光客を呼び込むというところまでは環境整備が行き届いていない場合が多く、難しいのではと思われる。少なくとも地域の人々に、地域に眠る歴史的な事象に興味を持ってもらい、姫路市域の義務教育のなかにも取り入れていくといった地道な努力がまず必要と思われる。

主な参考文献

- 『安寧』 兵庫県姫路護国神社社報 第二号 2011年4月1日号
- 石倉和佳 「明治から大正期の姫路と近隣地域の観光：『日本の旅行者のためのハンドブック』から見る」 『兵庫県立大学環境人間学部研究報告』 23 (2021) : 115-128
国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/> 20211201
- 『山陽鉄道旅客案内 一名 山陽道名所図会』 山陽鉄道会社運輸課編纂 1891年
「塾統～慶應義塾の伝統24 中上川彦次郎」 keiocampus.net 2005年
https://web.archive.org/web/20070513210021/http://www.keiocampus.net/archives/2005/06/post_306.html 20211218
- 『生活景—身近な景観価値の発見とまちづくり』 日本建築学会編 学芸出版社
2009年
- 中村良夫 『風景学入門』 中公新書 1982年
- 橋本政次 『近代播磨文学史—鷺城文壇を中心とした』（増補新版） 姫路文学館
神戸新聞総合出版センター 初版1964年 再版1996年
- 橋本政次 『千姫考』 のじぎく文庫 神戸新聞総合出版センター 1990年
- 橋本政次（編） 『播磨考・姫路市町名字考』 臨川書店 1987年
姫路市教育委員会 「文化財見学シリーズ」
<https://www.city.himeji.lg.jp/kanko/0000002172.html> 20220124
- 『姫路誌』 姫路市編 1912年
- 『姫路名所案内』 橋本政次編 姫路市 1913年
- 『ふるさと白国』 白国郷土史愛好会編 白国自治会発行 1987年
- 『ふるさと八代 上』 ふるさと八代編集委員会 八代地区推進協議会発行
1994年
- 前田結城 「旧藩勤皇派中心史観の成立と展開—姫路を事例に」 『神戸大学史学
年報』 26 (2011) : 43-70
- 前田結城 「幕末中央政局における姫路藩『河合—有志結合』の活動について」
『新兵庫県の歴史』 1 (2009) 1-17
- 前田結城 「姫路藩における版籍奉還への政治過程—本領安堵・家名存続論の延長
としての版籍奉還建白」 『LINK』 5(2013): 68-86
- 村上石田 『播州名所巡覧図会』 全5巻 1804年
- 矢内正夫著 『姫路名勝誌（沿革考証）』 1899 (M32) 年
- わかやま新報 「史上2位の3462人 18年県内観光入込客数」 2019.8.17
https://www.wakayamashimpo.co.jp/2019/08/20190807_88406.html 20220121
- わかやま歴史物語 100 <http://wakayama-rekisho100.jp/> 20211227